三加和中学校　学校だより　第１９号

R3．11．11

文責　井上雄治

『一人の笑顔のために』

「てまえどり」

最近、コンビニ等で見かける**「てまえどり」**の表示。

農林水産省は、食品ロス削減に向け、一般社団法人日本フランチャイズチェーン協会、消費者庁、環境省と連携して、小売店舗が消費者に対して、商品棚の手前にある商品を選ぶ「てまえどり」を呼びかける取組を行っているのだそうです。

次は、以前読んでいたある会報に載っていた文章です。

スーパーに賞味期限が五日後の牛乳と六日後の牛乳が並んでいると、日本では殆どの人が賞味期限の長いほうを買って行く。より新鮮であり、保存も長く持つからである。しかし、アフリカの小さな村では、村人たちは賞味期限の切れそうなものから買っていくのだという。貴重な食べ物を捨ててはいけない。だから賞味期限の迫ったものを自分が買って、より新しい食べ物は仲間たちに残すのだ。仲間への思いやりのある消費、そして食べ物の総量が乏しいことを知っている消費。日本の私たちの消費に他者はいない。仲間はいない。まして、残された賞味期限の短い牛乳の行方を案じたり、考えたりする人はいない。物のあふれる日本では、仲間の顔の見えない寂しさが人々を益々孤独な消費に走らせている。本当に豊かな社会とは、どちらの国のことだろうか。

食べられるのに捨てられてしまう食品を**「食品ロス」**といいます。**日本の食品ロスは年間約６４６万トン（東京ドーム約５杯分）**になり、世界の飢餓に苦しむ人々に向けた食料援助量（約３２０万トン）を上回ります。現在、地球上には約７７億もの人々が生活をしていますが、途上国を中心に８億人以上（約９人に１人）が十分な量の食べ物を口にできず、栄養不足で苦しんでいます。

その一方で、先進国では余った食料がまだ食べられるのに捨てられているのが現状です。日本の食料自給率は先進国の中でも低く（カロリーベースで約４０％）、多くの食べ物を海外からの輸入に頼っています。しかしながら、多くの食品ロスを生み出しているという状況は、社会全体で解決していかなくてはならない課題の一つです。その解決策のひとつが「てまえどり」なのですね。

自分の事だけを考えるのはでなく、周囲に対して目配り・心配りができる三加和中生が育っています。

☆先日の２年生の修学旅行での出来事です。最終日の３日目、昼食会場に入ろうとしていたとき、私たちと同様にそのお店に入ろうとされていた一般のお客様がいらっしゃいました。私たちは列をなしてその昼食会場に入っていたのですが、一人の女子生徒が立ち止まり「お先にどうぞ」と一般のお客様のために入り口の通路をあけてくれたのです。自分より一般のお客様を優先するその心配りに心があたたかくなりました。

☆１１月７日（日）の金栗マラソン大会での起業体験販売活動の日です。マラソン大会も終わり、町職員の方々がのぼり旗の後片付けをされていました。すると、まだ売れ残っている商品の販売を続けていた会社の２年生男子一人と３年生男子一人が、町職員の方々の手伝いを始めてくれたのです。あとで、町職員の方が「とってもうれしかったです。」と感謝の気持ちを伝えられました。